津朝日　2023年（令和5年）3月14日（火曜日）

伝統の技術を次代へ

5人が沼津垣の製作を学ぶ

市シルバー人材センターは、沼津垣の魅力を再発見して次代に継承していこうと、沼津垣製作講習会の実習を7日から10日まで千本の同センター作業所で開き、5人が受講、4日間で沼津垣を完成させた。

沼津垣は、箱根で採れる直径1㌢程の丸いメダケ（通称、シノダケ・箱根竹）を16本ずつ縦横互い違いにくぐらせて網代に編んで作る。強い海風にも倒れないという機能性だけでなく、見る角度によって網目模様が美しく変化する繊細な造形美も兼ね備えている。

西風が強い沼津の風土で、潮風を和らげ、海岸からの砂の侵入を防ぐ竹垣として約400年前に考案され、江戸時代に盛んに作られた。沼津宿でよく見られたことから土地の名が付いたと言われる。

同センターでは、将来にわたり沼津の伝統文化を守り育てていこうと、独自事業として講習会を開いて技術を伝えるとともに、販売を手掛けている。

製作に多くの手間と時間を要すため、製作費が高くなり、また近年の住宅事情の変化から一般家庭で施工されることは少なくなったが、市内の店舗等からの依頼もある。

講師を務めたのは4人。受講者達は事前に行われた座学での知識を基に、竹をゴムバンドで固定し、金槌の先で寄せて揃え、少し編んでは全体を矯正する作業を繰り返した。最後にマダケを割って垣根を裏表から上下3カ所で押さえて銅線で固定し、高さ1・8㍍の沼津垣を完成させた。

講師を務めた土屋諭さん(77)は「昨年のばらつきがあったので、今年は作業を進めやすいよう工夫し、作業工程を簡略化することで、全員が同じテンポで作業が進み、出来栄えも良くなった」とし、指導するにも一工夫を加えた。

昨年、講習を受けたのをきっかけに同センターに会員登録し、今年は講師を務めた伊藤登さん(68)＝松長＝は「沼津垣に興味があって受講し、講習会の後、もっと作ってみたいと思って沼津垣の製作に参加するようになった。昨年よりも精度が上がった」と話す。

受講者の1人、佐藤光明さん(69)＝大岡＝は「竹をまっすぐにするために火で炙（あぶ）って曲げたり、きれいに揃うように合わせたりと、専門技術が必要だが作業は楽しかった。反省点もあるので、次回も参加して改善したい」と言う。

趣味のDIYで竹垣や門松などを自作する兼子ミハルさん(53)＝下香貫＝は「沼津垣の実物を見て作りたくなった。製作は楽しかったので、自宅でも部屋に置けるサイズで製作してみたい」と話し、参加者は、それぞれ完成した沼津垣を持ち帰った。

なお、同センターでは、沼津垣の製作販売を受け付けている。昨年の受注件数は1件だったが、沼津の伝統文化を継承し、製作する機会を増やすためにも、沼津垣の普及を願っている。

問い合わせは同センター（電話964―1153）。

講師のアドバイスを受けながら沼津垣作りを行う参加者。写真左は完成間近＝シルバー人材センター作業所で